

学級における被受容感を高めるための支援

～短時間・分散的な構成的グループエンカウターの実践を通して～

藤田 悠生

教育実践高度化専攻

児童生徒支援コース

1 研究の目的

現代では、不登校児童生徒数は増加の一途を辿っており、不登校の未然防止に向け、学校が全ての児童生徒にとって安心安全と感じられるような居場所となることの重要性が指摘されている。

そこで筆者は先行研究を基に、居場所を構成する要素の一つとして「被受容感」に着目した。この被受容感を高める手段として、構成的グループエンカウター（以下SGE）を用いた。先行研究でSGEの実践によって被受容感が上昇したことを踏まえ、本研究ではそのSGEを短くして、週の中で分散して実施することで、被受容感が高まるだけでなく、継続的な実施が可能となると考えた。

以上より、本研究では、短時間・分散的なSGEによって被受容感を高めることを目的とする。

2 基本的な考え方

（1）被受容感について

「被受容感」は心理学者杉山崇が抑うつ研究で提唱した概念で、「自分は他者に大切にされているという認識と情緒」と定義されている。居場所に関する研究では、被受容感が居場所の要素の一つとして重要視されており、杉本・庄司（2006）は、居場所を構成する因子に「被受容感」を含め、特に教室での被受容感の重要性を指摘している。つまり、被受容感は学級や集団の居場所形成に影響を与えると考え、本研究ではSGEを通じて被受容感を高め、安心できる空間を作ることが目標である。

（1）構成的グループエンカウター（SGE）について

SGEは、1970年代に國分が提唱した体験活動であり、自己や他者を理解し、最終的には行動の変容を目指すことを目的としている。参加者は、エクササイズを通して自己開示し、本音を交流することにより自己や他者を理解し、自己受容を促進する。國分（2018）はSGEを学校に導入するメリットとして、学級に安心感や自己表現を育てることを挙げており、SGEは「居場所」の形成に有効と考えられる。実際に、藤田・西川（2002）はSGEを通じて被受容感が高まることを確認した。SGEの特徴としては、柔軟なエクササイズを選択でき、学校現場に適応しやすい点が利点とされている。そこで、本研究では、SGEをより実践しやすいよう、15分の朝活動や2分ショートエクササイズを実践することで、被受容感を高め、学校現場でより継続しやすいものにする方法を検討した。

3 研究の実践

（1）対象 茨城県の公立小学校 第5学年X組 25名（男子12名、女子13名）

（2）実践期間

前期：2024年5月20日（月）～6月7日（金）

後期：2024年10月16日（火）～10月29日（火）

(3) 分析の手立て

杉山・坂本（2006）が作成した被受容感尺度を用い、5 件法で調査を行った。尚、調査は前期実践の前後、後期実践の前後の全 4 回実施した。

また、実践後に児童による自由記述式のアンケートも実施し、分析の手立てとした。

(4) 実践内容

前期実践では、ショートエクササイズ（週 2 回・授業前 2 分間）と朝の SGE（週 3 回・朝の 15 分）を実施し、後期実践では前期を踏まえ、朝の SGE のみを実施した。実践内容については以下に示すとおりである。

前期 1 週目	SGE：われら〇〇族	ショートエクササイズ：あわせアドジャン
前期 2 週目	SGE：究極の選択	ショートエクササイズ：ブレインストーミング
前期 3 週目	SGE：共同絵画	
後期 1 週目	SGE：すごろくトーキング	
後期 2 週目	SGE：みんなでリフレーミング	

4 研究の結果と考察

4 回の調査の結果からは、学級全体で実践によって被受容感の数値が上昇したとはいえないが、1 回目の調査時点での数値で上中下群に分けて分析したところ、下群においては、数値の上昇に有意差が認められ、過半数の児童について、実践期間における数値の上昇も認められた。下群の自由記述に着目すると、上位群と比しても「楽しい」「おもしろい」という記述が多いことが分かった。

つまり、SGE によって児童のコミュニケーションの機会が増加し、相互理解を深めていく中で、その楽しさ、おもしろさを実感できたことが、下群の被受容感の上昇につながり、中上群はもともとそのような機会が多かったからこそ数値に効果が表れにくかったのではないかと考えられる。

5 研究の成果と課題

本研究では、SGE を短時間で継続的に実施することで、特に事前の調査で被受容感の数値が低かった児童に効果的だったことが確認された。短い時間で実施することは現場で継続しやすく、児童に楽しみながら活動させることが利点であり、本研究のようにエクササイズを繰り返すことで自己理解や他者理解が深まり、学級の居場所づくりに貢献すると考えられる。

本研究で使用した SGE のエクササイズは学級の状態に合わせて選ばれたが、エクササイズごとに効果は異なるため、選定には注意が必要である。SGE はゲーム性が強く、児童にとっては楽しいが、シェアリングなどの振り返りがなければ効果が薄れ、振り返りを通じて学びを深める工夫が求められる。また、SGE の実践にはリーダー（教師）の力量が重要であり、エクササイズ選定や振り返り方法を工夫することが必要である。

6 主な引用文献

國分康孝・國分久子（2018）『構成的グループエンカウターの理論と方法 半世紀にわたる探求の成果と継承』図書文化。

杉山崇（2001）「抑うつ者の自己：他者体系 ～ 精神分析的、精神医学的見解から実証に基づいた臨床心理学研究へ」『学習院大学人文科学論集』X, 127-140.

藤田正、西川潔（2002）「構成的グループ・エンカウター導入による他者からの受容感の変容」『教育実践総合センター研究紀要』11, 69-73.